論文審査の結果の要旨

2022 年 2 月 21 日

申 請 者：DL2017-102　王　譞翾
論文題目：中国の大学の日本語教育における「日本語言語学概論」の授業研究
　　―「学習共同体」理論に基づく教室実践を通して

研究の背景に、中国の大学における「日本語言語学概論」（日本の大学の「日本語学概論」）の位置付けがある。この科目は、日本語専攻のカリキュラムに必修科目として配置され、「日本語の知識内容を体系的に理解する」科目とされている。そこで学生は、「高級日本語」などの日本語学習の科目とは異なり、音声や語彙、文法など日本語の言語学的な知識を学ぶ。これを背景に、申請者は、この「学びにくく、教えにくい」科目の改善を目指すことにした。そのために、「日本語言語学概論」を「内容科目」と、日本語学習の科目は「スキル科目」と捉えなおし、授業改善の基礎に佐藤学の「学習共同体」の理論を据えた。さらに、日本と中国のアクティブ・ラーニングの状況も考慮し、授業のデザインから学生による評価までの一連の過程の実践と考察を着実に行った。論文審査と口述試験の結果、合格と判定された。以下、詳細を述べる。

学位申請論文では、学習共同体の理論がまとめられ、その中で従来の授業との違いの例として、グループ学習との対比が述べられる（第 2 章）。グループ学習では、教員から少人数の学生グループに課題が与えられるのに対し、学習共同体では、教員は学生と同じくメンバーの一人であり、ともに「対象世界との対話」と「他者との対話」、「自己との対話」を重ねつつ、能動的な学びを実践するという。これは、申請者が、学習共同体の理論の上に立って従来の授業を再検討し、新たな授業の構築に向かうためのヴィジョンでもある。

そして、「日本語言語学概論」の中国における研究と学習共同体に関する研究を検討した（第 3 章）。「日本語言語学概論」に関する先行研究からは、教員主導の授業で、学生が受動的な姿勢になっていることや、学習者中心の授業の試みはあっても「具体的な実践を踏んだ上で提唱」されたものではなく、改善効果も不明であることなどを指摘する。そして、学習共同体の研究のうち大学教育についての実証的な研究は少なく、さらなる実践と研究の余地があることを示した。第 2 章と第 3 章では、学習共同体の理論や関連分野についてより広く、詳細に論じてもよかったとも思われるが、しかし、研究の基盤として十分なものになっている。

次に、申請者は三つの研究課題を立てる（第 4 章）。それは、「学習者と教師其々は本科目の授業をどのように捉えているか」（研究 1）、「『学習共同体』の理論に基づいた内容科目の『日本語言語学概論』の実践教室は如何にデザインされ、また、どのような様相を呈しているか」（研究 2）、「新しい『日本語言語学概論』をどのように評価しているか」（研究 3）である。

研究 1（第 5 章）は、学習者と教員に対するアンケート調査とその結果の分析である。ここでは、予備調査から本調査の項目を作成し、本調査の結果に SPSS（Ver.20）で因子分析を行った。その結果、学習者対象の調査からは、「教師や仲間によるサポート」など四つの因子が抽出された。また、教員への調査からは、「教師―学習者間のインターアクションを促す工夫」など四因子が抽出された。因子分析の方法は適切であり、考察の結果、学習者同士の学び合いの場の必要性や教師コミュニティの形成の重要性などの見解を得られたことは堅実な研究の成果である。

研究 2（第 6 章）は、実践教室の全体像を示すことを目的とし、授業のデザインと授業の実践、教員・学生の授業参加の考察を行った。授業内容の選定のために、申請者は予備調査を行い、学習者が興味を持てる内容を選定した。そして、学習共同体の理論に沿って、一回の授業を、事前課題と授業内でのグループ・ディスカッションと発表、教員からのフィードバック、授業後の振り返りによって構成し、「対象世界との対話」、「他者との対話」、「自己との対話」の達成を追求す

る実践を行った。そして、この実践を考察する資料として、授業の録音、タスクシートや申請者の観察メモ、学生の発表の写真、教研ミーティングのノートなどを収集し、「教室談話分析の手法」によって質的に分析された。その視点は、教員と学生が、対話を通じて学習共同体がどのように具現化したかである。その結果、授業デザインについては、同僚の協力を得て、授業の実践上の問題点とその議論、次回の授業計画の修正といった一連の過程を共有し、「教師共同体」の構築を実践することができたことを明らかにした。また、この授業での教員の役割として、日本語の非母語話者である点を生かし、学生とともに学びを続ける立場に自らを置くことができるという見解を得た。教員と学生の授業参加については、資料の分析を通して、学生が、お互いに聴き合う関係を作り、自分のわからなさの開示とその解決に向けた能動的な思考に向かう「仲間との支え合いで始まる探究的学習」を行うことができ、「知識の共構築」に至ったという結果が得られた。教員はその過程で、教室での学生との関係を、「知識の伝達者から知識の共構築者」へと転換することができ、同僚との議論等によって「反省的実践家」となることができたという。

これらの考察結果に至るまでに、諸資料から、教員同士の相互作用による授業実践の改善の過程と、学生が対話によって能動的に理解していく過程、さらに教員が実践とリフレクション、教員どうしの対話によって、授業を捉えなおす過程が記述されている点は興味深く、高く評価できる。ただし、論証の過程は、事例分析の数を増やすことで、一学期間の様子がより具体的になり、結論に至る考察もさらに緻密で説得的なものになったと思われる。また、申請者の考える学生への働きかけの方法について知見を得られたことが口述審査において示されたが、それが論文中で議論されるとさらに説得力が増したと考えられる。

研究 3（第 7 章）は、受講生による授業の評価の分析である。ここで申請者は、自分の授業を受講した学生に対し、半構造化インタビューを行った。その結果を、KJ 法を用いて質的な分析を行い、最終的に 7 つのカテゴリーに分類した。その結果、学生から申請者が行った「日本語言語学概論」に対して肯定的な評価が得られた。そこからの考察として、「学習共同体が構築された授業」や「お互いの理解促進による信頼感が生まれる授業」など、研究 1 で得られた学生からの評価を改善する授業だったことが示された。これは、申請者の研究と実践の成果を示すものである。

そして最後に、研究のまとめと研究の意義等が示され（第 8 章）、学習共同体理論に基づいた授業が、教員から学生への知識の伝授といった一方向的な授業の代替となり得るという主張と、教育現場への提言も述べられた。申請者が自分の実践を振り返り、研究課題に対して独自性のある知見が得られた点は十分に評価できる。

以上のように、申請者は、「日本語言語学概論」という授業の性質を捉えなおすことから始め、学習共同体の理論によって授業をデザインしなおし、かつ、学生と教師の学習共同体と教師の学習共同体を自ら構築することで、学生と教師が能動的に学んでいく過程を実現することができた。その実践の柱としてアンケート調査や談話資料にもとづく実証的な研究があることも評価できる。さらに、本研究が、中国の大学が求められているコミュニケーション能力の育成という課題への申請者なりの解答になっている点で、社会のニーズに合致してもいる。言うまでもなく、一つの科目とその授業には、授業のデザインや学生とのインタラクションなどさまざまな面がある。それらについて申請者は、学位申請論文の執筆を通して多くの知見を得ることができた。今後の研究の発展を期待したい。

審査員（主査）　吉田　朋彦

審査員（副査）　陳　岩

審査員（副査）　袁　福之

審査員（副査）　宮　偉